もうひとつのシンデレラ（後半）

シンデレラは死んだお母さんにもらったガラスの靴をはいてパーティーに行きました。パーティーは3日間です。シンデレラはお金持ちの息子と踊りながら考えました。「この3日のうちになんとか恋人にならなくちゃ･･･でも、どうすればいいかしら･･･。私が毎晩12時前にパーティー会場からいなくなれば･･･、お金持ちの息子はどうしたんだろうと思うはずだわ。うん、そうよ。そして3日目に私のこのガラスの靴を1つだけ階段に落としていけば、息子はきっと私をさがすわ。」3日目、シンデレラは走りながらガラスの靴を脱ぎました。しかし、とても急いでいたので、ガラスの靴を2つとも脱いでしまいました。「あ。いけない。」シンデレラは靴をとろうとしました。そのとき、「シンデレラ。待ってくれ。」と、お金持ちの息子があとから走ってきました。シンデレラはそのまま走ってうちへ帰りました。

お金持ちの息子はシンデレラが通った階段を同じように降りていました。階段にはガラスの靴が落ちていました。でも、ガラスの靴には色がありません。それに、外は夜です。息子にはガラスの靴が見えませんでした。

そこに、パーティーから帰る若い女の人が来ました。「あら、何かしら。あの、キラキラ光っているのは…。」そして、ガラスの靴に近づきました。「まあ、すてきな靴。ガラスの靴だわ。はいてみましょう。…あら、ぴったり、はいて帰りましょう。」そう言って、その女の人はガラスの靴をはいて帰ってしまいました。

次の日。シンデレラはお金持ちの息子が来るのをずっと待っていました。そして、

夜(よる)になりました。「変(へん)だわ…。どうしたのかしら。どうしてあの人(ひと)は私(わたし)をさがしに来(こ)ないのかしら。でも、希望(きぼう)を持(も)って頑張(がんば)りしょう。あの人(ひと)が私(わたし)のところに来(く)る日(ひ)まで…。」お金持(かねも)ちの息子(むすこ)は来(き)ませんでした。でも、シンデレラは明日(あした)を信(しん)じて暮(くら)しました。